

"Japan/USA Workshop on Biological Timing" および公開シンポジウム "生物リズムと生体機能" について

大石 正
奈良女子大学

文部省と米国国立科学財団との国際学術研究「生物学的測時機構の系統的解析」（代表：本間研一北海道大学教授）の一環として、奈良でワークショップ "Japan/USA Workshop on Biological Timing" および公開シンポジウム "生物リズムと生体機能" が開催された。ワークショップは奈良女子大にて行われ、公開シンポジウムは猿沢の池の南側にある奈良市ならまちセンターにて行われた。会場の選定、奈良県コンベンションセンターとの交渉等については、奈良女子大の登倉、大石が当たり、当日の進行に関しては北大グループと奈良女グループが協力して行った。ワークショップに関しては、3月20、22日に開催され、公開シンポジウムは中日で休日の21日に開催された。

7月20日のワークショップは、約90名が参加して開かれた。最初 Dr. Hudson によりバージニア大の Center for Biological Timing のプログラムについて説明があった後、"Molecular and Genetic Basis of Biological Timing", "Oscillatory Coupling", "Pineal/Suprachiasmatic Nucleus/Others" の三つのワークショップが開かれた。7月22日においては、"GnRH Rhythm" と "Biological Timing in Humans" の二つのワークショップが開かれた。いずれのワークショップにおいても活発な議論がなされたが、時計機構の解明にはまだまだ遠い道

のりがあるようである。米国のグループの特徴は、いわゆる概日リズムの研究者に GnRH(gonadotropin-releasing hormone) リズムの研究者が積極的に参加していることである。今回、この分野の日本の研究者も1名スピーカーとして参加していたが、日本の時間生物学会も生物と時間との関係についてももう少し幅広く活動する必要があるかもしれない。

7月21日の公開シンポジウムには約150名の参加があり、盛会であった。北海道大学本間研一先生の開会の辞に続いて、「生物リズムの発生」と題して、フリーゼン博士による"サーカディアンリズムのコンピューターシミュレーション"、近藤孝男博士による"藍色細菌の生物時計の分子遺伝学的解析"、ブロック博士による"網膜内生物時計の細胞機構研究"の3題が発表された。午後の前半は「生物リズムと生体機能」と題して、フォスター博士による"哺乳類のサーカディアンリズム光反応性"、本間さと博士による"哺乳動物における多振動体サーカディアン機構"、ピント博士による"哺乳類サーカディアンリズム突然変異体「クロック (Clock)」の分離、遺伝子マッピングおよび表現型解析"、大川博士による"ヒトの生体時計の障害"が発表された。最後のセッションでは、北海道大学の広重先生が都合でこられなくなったため、メナカー博士による"サーカディアンリズム機構研究の新しいアプロー

チ”のみの発表となった。シンポジウムのパンフレットには英文と日本語訳があり、また各セッションの後に指定討論者による内容の紹介があったが、かなり高度な内容で一般の参加者がどの程度理解できたか心

配ではある。しかし、シンポジウムの前に問い合わせた人のうちには、英語も O.K.、難しいのも O.K. という人が何人もいて頼もしかった。

原稿募集

本会誌の原稿を募集しています。実験ノート、研究室紹介、人材募集など内容は問いません。ふるってご応募ください。年に2回しか出ませんので、急を要するものは難しいですが、会員相互の情報交換の場としてお役に立つのではと考えています。よろしくお願いします。

事務局

